

## 園児・保護者・保育士相互のコミュニケーションと空間セッティング

研究代表者	渡辺 治	(渡辺治建築都市設計事務所 所長)
共同研究者	高橋 久雄	(元昭和女子大 教授)
	松田 典子	(文教大学 専任講師)
	和田上 貴昭	(目白大学 准教授)
	三浦 修子	(至誠第二保育園 園長)
	長谷川 育代	(万願寺保育園 園長)
	廣瀬 優子	(しせい太陽の子保育園 園長)
	高橋 滋孝	(至誠あずま保育園 園長)
	高橋 紘	(至誠保育総合研究所 所長)
	佐藤 将之	(早稲田大学 准教授)
	稲葉 直樹	(早稲田大学 助手)
	桑江 佐愛	(早稲田大学 4年)

### 研究の概要

調査は園の行事の中での人のビヘイビアをつぶさに観察し、疑問点は保育士などへのヒアリングを行いながら、ビヘイビアと空間や建築との関連性に関しての知見を得ることと、こどもが「育つ」ということに関する考察を行った。

行事は外部-内部、狭い-広い、動線、音響の他、行事に参加する園児と保護者との距離が関連していることが分かった。

こどもの「育つ」は保護者や保育者に感動を与え、育てようとする意志を高め、こどもを応援し褒め、評価することは、こどもが「育つ」意志を高めることに不可欠な関係であることを認識した。同時に、行事は保護者と園児、保育者と保護者、保育者と園児との信頼関係を形成するためのコミュニケーションや触れ合いの重要な「機会」を提供していることが認識された。

こどもは親の応援を受けて安心して育つような「動物」である。しかしその反面、親からの応援、家族の保護、期待がないと「育つ」意志は生まれて来ないだろう。そのようなことを実際に観察することにより理解することができた。

保育士や保護者は限られた建築空間を、例えば狭さの良さを認識し行事が盛り上がるように工夫して場所と時間を設定し、行事はさまざまな重要な場面を提供することにつながっていた。また、こどもと親との距離が縮まるように動線や居場所の設定を行い、外部では音が近隣に迷惑にならないよう、同時に行事が盛り上がるように音響が工夫されていた。

保育施設を設計する時に、保育士たちからさまざまな要求や意見を取り入れて設計に生かしてきたつもりであったが、実際に行事の様子を見せていただいて、建物として何が保育上重要であるかが分かって来た。

これから、これらの知見や理解を生かして、より感動的な保育ができるように努めたい

キーワード：コミュニケーション、ビヘイビア、セッティング、パーソナルスペース、アフォーダンス、ソシオペタル／ソシオファーガル

### 1. はじめに

この数年、政府は全国の少子化対策の一貫として待機児解消の施策を積極的に展開している。

その結果、保育所の数が急激に増えたが、増えれば増えるほど、待機児は増えた。

育児行為は母親に過度の負担を負わせる。保育園にこどもをあずかってもらえれば安心してこどもを生み、働く事もできる。このまま保育園を増やせば、出生率や女

性の就労率も高まるかも知れない。そういった中、建築に何ができるだろうか。理想的な保育とは何なのだろうか、「育つ」とは何なのかを、自分が設計した建築空間などで行われる行事の観察調査を通じて認識しておく必要があると考えた。

## 2. 先行研究

### ・ソシオペタル／ソシオフィーガル

オスモンド (Osmond) が精神病院のあり方についての研究で空間デザインの2つのタイプとして提唱した概念である。ソシオフィーガルとは、人間同士の交流を妨げ

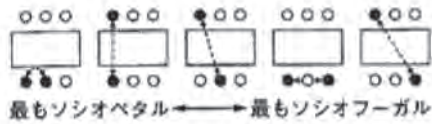


fig.1 テーブル席の分類

るようなデザインを指し、ソシオペタルとは逆に交流を促すようなデザインを指す。そして特に精神病院のデザインにおいてはこれらの2つのデザインの概念の使い分けが重要であると説いた。(テーブルを介した関係：fig1、fig2)



fig.2 座る向きを限定しない屋外のベンチ

いろいろな向きで座ることができるベンチは、ソシオペタルとソシオフィーガルどちらの状況にも対応することができる。

### ・パーソナルスペース

社会心理学者であるロバート・ソマー(R. Sommer)によると、人には「侵入者が入れないようにその人の身体をとり囲む、見えない境界をもった領域」がある。ロバート・ソマーはこのなわばりをパーソナルスペース (personal space) と名付け、持ち運びができるという点からポータブルテリトリー (portable territory) とも

呼んだ。fig.3は、「相手から離れたたい」と感じる度合いの強さの境界線を引き、自己の周りに存在するある種のパーソナルスペースの大きさを調べた実験の結果である。人は、後ろ方向よりも前方向により敏感であること、立ち話をする距離は「評価4：すぐに離れたたい」よりも遠いが「評価3」よりも近く、かなり接近した距離であることなどが読み取れる。

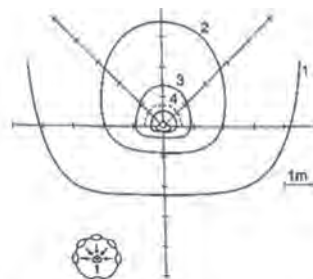
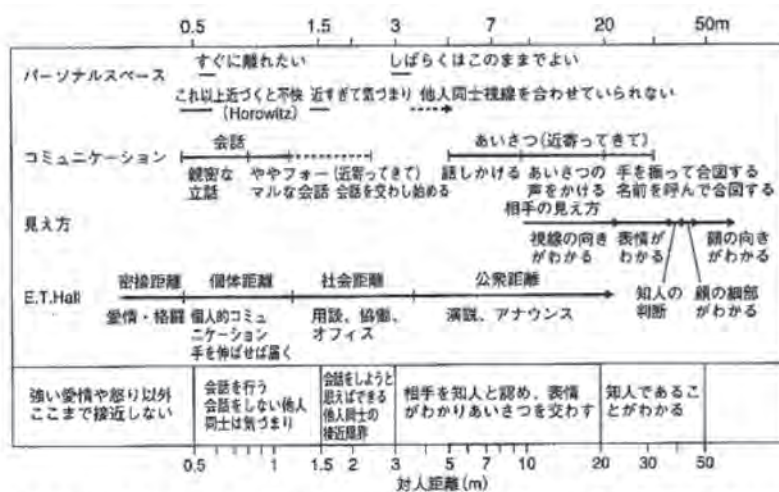


fig.3 実験により求めたパーソナルスペース [遠藤隆志、西出和彦 (1981)]

相手に対する感じ方  
 4：すぐに離れたたい  
 3：しばらくはこのままでよい  
 2：しばらくはこのままでよい  
 1：このままでよい  
 0：このままでよい  
 --- 立ち話をする位置関係

中央の人に、まわりから正面向きで近づいてくる他人の位置に対する中央の人の感じ方の分布(男性、立位)。



人間同士の距離のとり方は、図のようにおおむね分類できる(体の中心間の距離)。接触から0.5mまでは通常は近づかない。0.5~1.5mの間では会話が行われるが、会話をしない他人同士は近づかない。会話をしようと思えばできる限界は3m程度である。相手の表情がわかり、挨拶を交わすのは20m以内で、相手が誰だかわかるのは50m以内である。

fig.4 人間同士の距離の分類と意味づけ

・指示代名詞これ・それ・あれ

東京大学の西出和彦は指示代名詞これ・あれ・それを示す空間の形を描き出し、「それ」の空間がロバート・ソマー(R. Sommer)が言う、パーソナル・スペースとほぼ合致していることを実験で証明する。筆者(渡辺治)

は、fig.8の実物大の模型をつくることでその研究チームに参加し、研究成果は当時、ワタリウム美術館でのレジョ・エミリアの保育に関する展示に続く「人間動物園」(こどもに大人を展示する企画)で展示された。

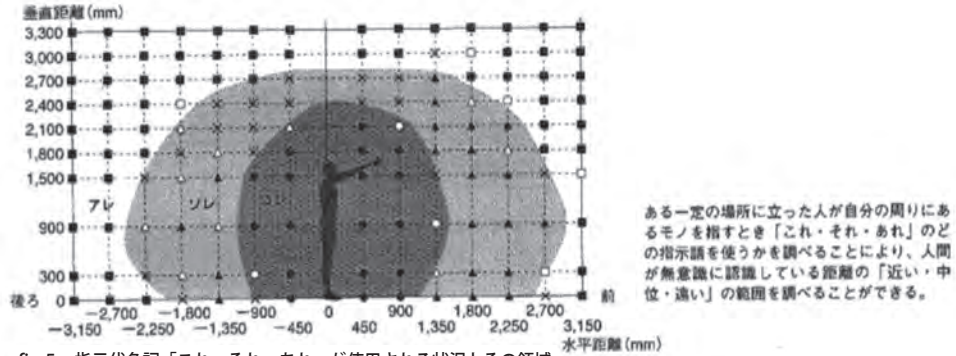


fig.5 指示代名詞「これ・それ・あれ」が使用される状況とその領域

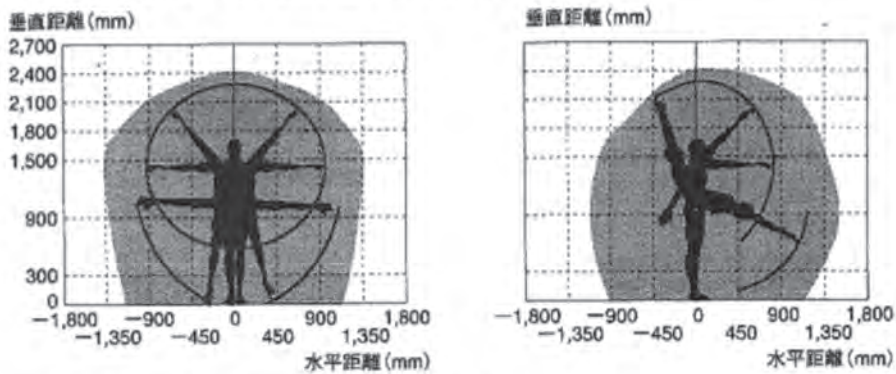


fig.6 指示代名詞「これ」の領域と動作域の比較

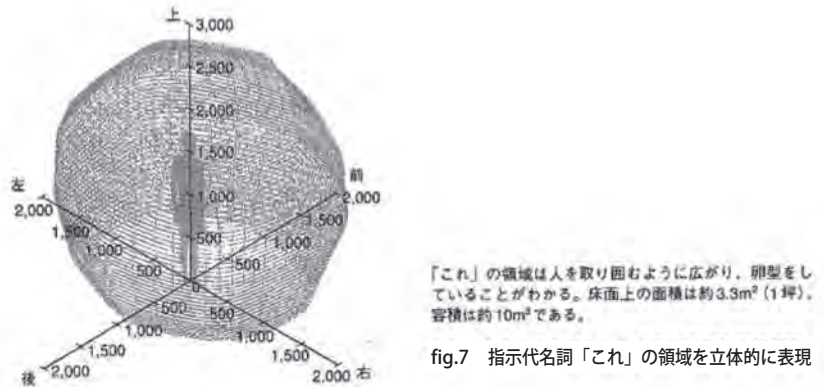


fig.7 指示代名詞「これ」の領域を立体的に表現



左: 外膜を付けた状態  
右: 膜を取り外して中に人が入った状態

fig.8 fig.3の「これ」領域をもとに作成した実物大モデル(フレームは木製、膜は布製で取り外すことができる)



### ・アフォーダンス

ギブソン (J.J.Gibson) は、その著書「生態学的視覚論」の中で、「環境アフォーダンスとは、環境が動物に提供するもの、良いものであれ悪いものであれ、用意したり備えたりするものである」と述べている。ギブソンが環境と知覚との相互依存的な関係を説明する手段としてつくったこの言葉は、アフォード (afford) という動詞 (提供する、可能にするの意) がもとになっている。アフォーダンスという単語は辞書にはなく、ギブソンの造語である。

### ・ビヘイビア・セッティング (行動セッティング)

Barker (1963) は、特に環境に着目し、環境が誰にでも共通の行動を起こさせると考え、こうしたある特定

の行動が生じる場を「行動セッティング」と名付けている。行動セッティングは物理的な環境の特性、人間が集まることにより生じる社会的な環境、あるいは文化が作用しあいながら形成されている。

たとえば、キオスクで金銭を支払い、賞品とおつりもらう。この行動は商店という物的環境と、貨幣制度による売り買いする文化的システムがあって発生する行動である。このように環境と行動をセットで取り出し研究対象としていた。

「環境行動のデータファイル 空間デザインのための道具箱」  
高橋鷹志+チームEBS編著、彰国社より抜粋、修正。

・以上

## 3. 研究の目的と課題

園児、保護者、保育士たちの交流、相互理解、保育などに空間セッティングや施設がどのように機能、連関しているかの基礎的な観察調査を行い、今後の保育所の建築設計のあり方を探る。観察調査を通じて自分が設計した空間セッティングや施設が意図通りに使われているか、どのように保育に生かされているかを把握する。そして、どのような空間セッティングや施設が園児、保護者、保育士たちの活動や関係性に影響を与えうるのかを考察し保育や設計の展開のための知見を得る。

## 4. 研究方法・対象

### 調査方法

#### コミュニケーションと空間セッティング

イベントの中で、保護者、保育者、園児らが、多様にコミュニケーションを行う様子をうかがい知ることができるので、コミュニケーションしている人同士の体の向きや距離、号泣している様子：行動パターンを観察する。

エドワード・ホール (Edward T.Hall, 1914-2009) の「かくれた次元」(“THE HIDDEN DIMENSIONS” 1966; 日高敏隆・佐藤信行共訳、1970) では、人と人の距離、人同士の体の向き関係から、コミュニケーションを取ろうとしているかどかを知ることができる。

このような人が無意識のうちにとる行動パターンの傾向を「ボリュレーションステレオタイプ」と呼ばれており、当調査研究では、イベントや送り迎えの場面で発生する行動パターンを観察することによって、空間との関連性に関して得られた知見をもとに、イベント

が提供する時間と空間がどのような役割を持ち得たかの知見を得るとともに、または「育つ」とは何か、「保育」に関する考察を行いたい。



すでに存在している空間や施設での保護者を含む活動を観察、記録し、その時に生じた疑問を保育士や職員などにヒアリングを行い、保護者などへのアンケートなどを参考にしながら、分析、考察を行う。観察記録方法は、ビデオ撮影で行ったが、全ての活動を鳥瞰的に記録することは不可能であるので、選択的にシーンを選んで録画した。月に1回、共同研究者同士の会議を持ち、疑問に対して答えていただいた。共同研究者は主たる研究対象の建物の園長である。

### 調査対象

以下のように保育園・幼稚園で観察調査を行った

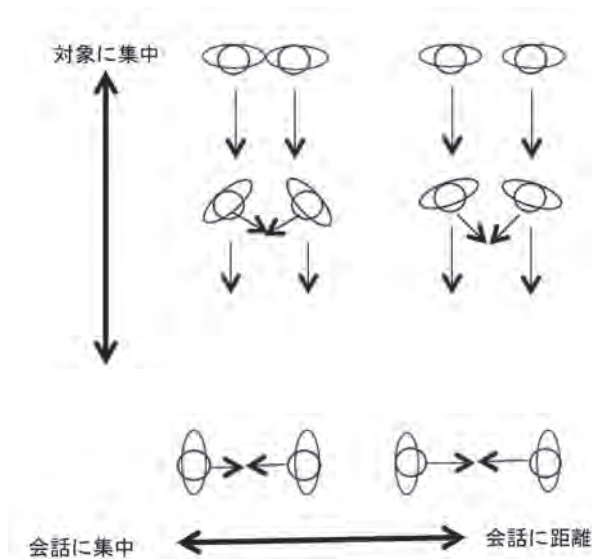
2015年 12/12 至誠いしだ保育園 (ISH)「お楽しみ会」w  
2016年 02/09 大塚保育園 演劇イベント「かぜのこ」  
w 02/12 明愛幼稚園 お誕生日会w 02/27 万願寺保育園 (MGH) おひなさま会w 03/16 東京ゆりかご幼稚園 卒園式w 03/19 至誠第二保育園 (SDN) 卒園式w 04/06 Pico ナーサリ久我山駅前 2歳児保育w 06/11 太陽の子 運動会w 06/18 至誠第二保育

園 デイキャンプk 07/02 万願寺保育園 わっしょい  
まつりwk 07/10 至誠第二保育園 降園時 w 07/21  
しせい太陽の子保育園 降園時 k 08/19 至誠いしだ保  
育園 (SIH) 降園時 k 08/24 万願寺保育園 降園時 k  
09/10 至誠第二保育園運動会 (日野市ふれあいホール)  
w 09/24 万願寺保育園運動会 (日野第4小学校体育  
館) w 10/12 至誠保育園 (SSH) 降園時 wki 10/15  
至誠いしだ保育園運動会 w 11/04 至誠よよぎこども  
園 降園時 wk

(w: 渡辺、k: 桑江、i: 稲葉)

## 5. 調査結果の概要

調査上認識し得たコミュニケーション行動は多岐にわたっており、網羅的に紹介することができないので、行事 (運動会、その他)、送り迎え時で生ずるコミュニケーションに分けて紹介する。



さまざまなソシオペタルの関係

観ることにより集中しながら感動を共感できる関係：観劇や映画鑑賞などで見られる関係である

互いの姿と観る対象を同時に視覚に入れながら会話をするような関係。立ち話などで生じる関係である。

会話に集中し、他のことはあまり視覚に入っていない関係：テーブルを会した会話、喧嘩する時などの関係

夫婦もしくは他人の保護者同士が横並びのソシオペタルな関係でしかも、体が互いに触れるような距離である対象を観ながら、会話が生ずるような機会は日常生活であるだろうか (夫婦やお母さん同士が、このようなセッティングで会話している様子を探すと、スポーツ、映画、ビデオ、コンサート鑑賞、コンサートなど、観る対象があつて、「感動を共有」しながら会話が生ずるビヘイビア・セッティングが日常でも存在している。)、と考えた時に、このようなイベントは、

- ・夫婦の自分のこどもの演技などを観ることで会話とこどもへの「愛着心」を生じさせる。
- ・イベントのさまざまなシーンについての共感を共に

## 1. イベント時のコミュニケーション

イベントはそれ自体が手が混んだ「空間セッティング」である。その中でさまざまなコミュニケーションが生ずる。

### 1) 会話

#### ・2人のコミュニケーション (会話)：夫婦同士、他人の保護者同士の会話

運動会の方を向いて相手の声が聞こえる距離でコミュニケーションをとっている。

MGHの「おひなさま会」では席が固定されており、夫婦や他人の保護者同士が隣合わせで着席しており、さまざまな場面で会話が生ずる。席は横並びなので互いの関係はソシオペタル<sup>(※fig.1, fig.2)</sup>であり、距離は体が触れ合うくらいの距離なので、互いのパーソナルスペース<sup>(※fig.3~fig.8)</sup>は重なっており、全員が自分のこどもを同じ保育園にあずけている親であるという共通要素があるので、会話が生じやすい。

(夫婦や他人の保護者) 味わえる機会を提供している。ということが言えるだろう。

特に共働きをしていて忙しい夫婦にとって互いが「**じぶんのこどもに関して感動を共有する**」ことは、夫婦の関係や「**子育て上非常に重要な機会**」を提供させていると言えよう。

さらに、他人同士であっても、その時の感動を分かち合えることは、苦勞 (肉体的・精神的な) を伴う保育に関するストレスの緩和と互いの理解、こどもに対しての「愛着心」を高めることにつながっていくのでは、と想像する。

集団のコミュニケーション：家族同士、子ども同士、保育者と保護者

Ex.子ども同士の会話



子どもは「パーソナルスペース（テリトリー：排他的空間）」を持っていないので、互いの体を接触させている。または、接触する＝コミュニケーション、であるとも解釈できよう。

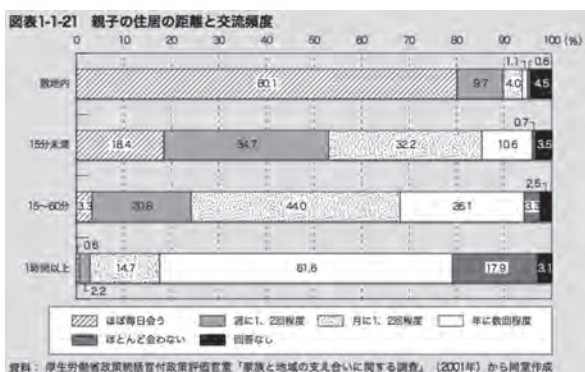
他人同士の子どもが兄弟以外でこのように接触し合うことは、社会性の獲得の基礎になるのではないだろうか。

家族同士のコミュニケーション（会話）

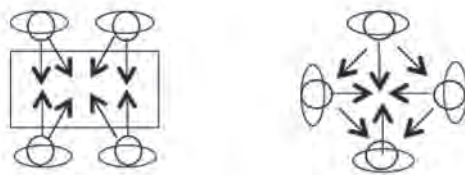
運動会やMGHの「わっしょい祭り」などでは、家族が輪になって会話している様子を観ることができた：輪になっての会話は、競技中などは子どもの方向を向いており、比較的外側に陣取っている家族、運動会がおわって、後片付けをしている間や、昼食などがある場合には輪になって会話する様子が観られた。

運動会などでは祖父母や保育園にあずけていない子どもを伴ってくる家族もあり、大人数の輪になる。

特に核家族化が進んでいる大都市部では、3世代が会える機会はまれになるので、貴重な家族間交流の機会（空間と時間）を提供していることになる。



「親子の住居の距離と交流頻度」（厚生労働省政策統括官付政策評価官室「家族と地域の支え合いに関する調査」（2001年）から同室作成）によると、祖父母が60分以上の遠距離に離れて住んでいる場合には、まったく会わないか年に数回の家族が8割になる。



家族4人の食事の時のソシオペタルな関係：4人が互いのコミュニケーションを密にとれる関係である。特に家族間ではこのような関係が生じなくなっているのではないかと想像される。

「わっしょい祭り」では家族が輪になるソシオペタルな関係が随所に発生する。こういった家族間コミュニケーションの貴重な「機会」をこの行事は提供している。輪になる位置関係ではあらゆる組み合わせの会話が生じ、しかも全員が同じ会話を共有することができる。

・子どもを介した家族間コミュニケーション

子どもがいることで、家族同士のコミュニケーションが生じている典型例。

子どもは夫婦のきずなとともに、家族同士のきずなにもなっているということがビジュアルライズされているようなシーンである。

かならずしも家族同士で会話があるわけではないが、子どもたちが遊んでいる様子を見て、笑いが発生する。日常では3世代が集まることは少なく、集まったとしても、親子間で談笑することはあるだろうか。

子どもは家族間に話題を提供し、家族同士を結びつける役割も演じる。



STK：核家族化が進む現代では、祖父母と行動を共にする機会が減っており、保育園などでのイベントは貴重な多世代交流の場となっている。



子どもを観ながらの会話



### ・こどもを介した他人の保護者同士のコミュニケーション

こどもを介して他人の保護者同士がコミュニケーションするシーンは、イベントの終了後に多発する。イベント時は保育者は運営側を勤めているために、保護者との会話が物理的にできないと同時に、保護者もじぶんのこどものひごろの「成果」や「育ち」を観るのに集中している。お父さんは撮影で忙しい。

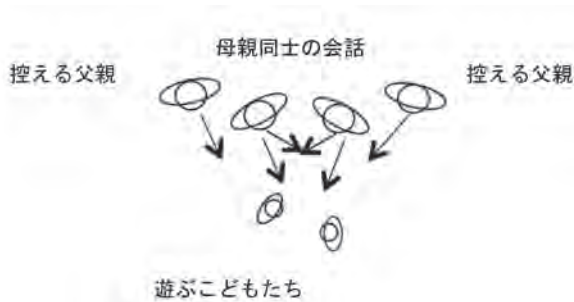
このようなシーンが生じるのは、保育園や幼稚園のイベント時のみではないだろうか。

概して、こどもを介して母親同士がコミュニケーションをしており、それを他の家族メンバーが取り巻いているケースが多い。

子育てを受け持っているのは、いぜんとして母親が圧倒的に多く、子育てという「苦勞」を共有できるのは、父親とよりも他人の母親でしかできないということであろう。

こどもを介して、母親同士が会話をすることによって、両者の家族もソシオペタルな状況を呈する。そういった中で、父親同士の会話がまれに生じることも観察された。

イベントの終了時に一気にさまざまな交流やコミュニケーションが生ずる。



本来夫婦のソシオペタルな関係が成り立っていたのが、母親同士が会話を始めると、夫婦のソシオペタルな距離関係は保たれながら、歪んでしまう。

父親同士は初対面であるケースが多いので、両者はソシオファーガルな距離を保とうとする位置関係になりがちである。

子どもたちは幼少なほど、親達の視覚内を意識して遊ぶ。それに対して年長の子どもたちは、遠巻きに活発に遊ぶ。

父親が母親同士の保育に関する会話を聞き、それを機会にして父親同士の会話が生じる母親同士、父親同士のコミュニケーションする「機会」をこの行事は提供しているのである。

### ・保育者と保育者とのコミュニケーション

#### 立ち話

立ち話は、大抵、目があうか若しくはどちらかから話しかけることにより生ずる。

中には (MGH) 結婚式の終了時のように、出口で保

育者らが話しかけやすいように、空間と時間をつくり、そこでさまざまな会話が発生している例もあった。

立ち話は比較的短く、保護者が保育者に対してお礼を述べているシーンが多かった

イベント時の保育者と保護者との会話は、必ずしも必要があって生じているものではなく、終わったあとにねぎらう、挨拶などの意味が強い。

お別れの際にこのような場面が設けられることにはある意図が読み取れる：家族と保育者が話しを始めるためには立ち止まらねばならないので、後ろにおのずと列ができるので、長話ができないので家族は言う事を短くまとめて伝えねばならない。また、保育者と話すことによって、保育者と家族との連帯感を生み、その日の体験を印象とともに記憶にしまい込ませることができる。

このようなビヘイビア・セッティングは、上述したように結婚式などでもつくられる。それは行事をしめくくり、いい印象として残す有効な手段であるからであると考えられる。写真撮影なども、会の最後に行われることもあるが、各々の家族と丁寧に挨拶を行う園のやり方に、家族とどのように接して「保育」を共有しようとするかの意図が見え隠れしている。

### 記念写真

イベントでは、こどもを集めて記念撮影するシーンはよく行われており、撮影係は主に父親が受けもつが、母親も携帯電話を使って撮影するシーンも頻発する。

特に卒園式時に生ずるが、担任の保育者とこども、家族が記念写真を撮っているシーンが発生する。

記念撮影はこどもの発育の記録であるが、昨今では写真アルバムをつくらないで、家族や参加できなかった父親などにメールで送ったり、ビデオ動画での撮影、ネットでアップするなどの使い方が新たなネットや機器の発展に伴い変化してきている。

写真は家族や知人に見せるとともに、こどもの成長や保育者を記録に留めて、未来に保護者や当人のこどもが見て楽しむものと考えられるが、こども自身が家族にとって中心にあることを証明している。

実際に、年賀状に印刷されている写真は、こどもが生まれた瞬間からこどもの写真が多くなる。

保育園でのイベントは「こどもの成長の記録」であり「家族の記録」を残させる役割もあったことに気づかされる。



カメラに向かって「ポーズ」する家族。笑顔をつくる、つくらせる、このような一種の「やらせ」を行うのは、「楽しい記録」として残したいという意図の現れか。



撮影された写真はアルバムに整理され、独立や結婚した際に親がこどもに育てた記録と記念として持たせるとともに、将来生まれるこどもに対しても若い親達が同様にこどもに「愛着心」を持つようにという思いが込められているのではないかと想像する。

### 保護者が保育士を評価し応援する 至誠たいようの子保育園の運動会

観察対象の運動会で共通であったが、運動会がおわった後に、ひとりひとりのこどもにメダルなどをあげながら褒めることが行われていた。しせい太陽の子でも同様であったが、サプライズで保護者がメダルをつくって保育士にこどもの手から表彰するシーンがあった。



160611 STHの子運動会

先生を楽しませることを楽しんでいるこどもたち。人に楽しい思いをさせることが自分の喜びになる、という体験は日常でもなかなかできないことである。父兄会は自発的な集まりであり、そこからの企画も自発的である。「生んで育てた」経験を持つ父兄らは、まだそれを経験していない保育者に対する「啓発行為」にも見える。

- ・「評価し褒める→より努力する」ということを保育士は運動会や演劇などのイベントの機会を利用してこどもたちを褒めてみせて、その言葉を受けてこどもたちががんばる関係性が明確にあることを確認した。それと同じことを保護者から保育士に行う事は、褒めるとがんばるという法則を応用して、保護者が保育士に保育をがんばるように期待していることを表している。

- ・保育士の大半は保護者よりも若く、学校で保育に関して学んできてはいるものの、結婚もお産、子育ても経験していない。そのような若く子育ての経験に乏しい保育士に我が子をあずけるのは、不安に違いない。その現れが保育士を表彰する行為に現れているのかもしれない。
- ・保護者は保育園にこどもをあずけて働きに出ているので、どのように保育されているのかを正確に知る方法がない。であるならば保育士さん褒めることによって、より努力していただく、と考えたのかもしれない。
- ・また、保護者は保育士にクレームをつけることがよい結果を生まないことを知っているのだろう。なぜならば、クレームをつけることによって、保育士が不機嫌になり、自分のこどもが不利益を被るかも知れないからである。

上記のようなコミュニケーションは「保護者→保育士」の意志・希望を伝達するためにこの機会をうまく利用している例である。

### ・保育者同士のコミュニケーション

行事では保育士らは、受付、案内、音響や放送、司会、器具の準備、白線を描く、こどもたちの誘導などそれぞれが分担された役割をこなしている。

おわった後は、父兄や卒園生の小学生なども参加してかたづける場面も観察された。

保育士同士は募って、談笑する。達成感を共有しているようである。

保育者たちにとっても、一同が会してひとつのことを実現させる貴重な機会なのである。

### ・卒園生同士のコミュニケーション

家族の一員として姉や兄が来た時に保育園が同じであることがあり、卒園生同士が固まって会話したり、遊んでいる場面も観察された。保護者はこどもが小さい場合には連れてくるので、同伴して来場したこども達同士が卒園後に再会することになる。結果的に、保育園の行事は、こども達が再会する機会も提供しているとともに、家族と共に兄弟の子育てに参加している意識も養われていると考えられる。

## 2) スキンシップ（接触性行動）

スキンシップは、直接的なコミュニケーションである。イベントの会場内では、保育者や保護者がこどもとスキンシップをとる場面はいたるところで発生する。

### ・祖父母とこどものスキンシップ

家族とこどものスキンシップがイベント時に頻繁に観察される。抱きかかえる、後ろからかかえる、手をつなぐ、頭をなでるなどである。



「孫は自分の子よりもかわいい」と言われるように、祖父母は孫を溺愛（できあい）する場面が頻発する。自分の子に対して「かわいい」と感ずるのは、育てる意欲を持つために、DNAに組み込まれていると思われるが、祖父母が孫を自分のこども以上に「かわいい」と感ずることは、農家などで3世代家族で協力して労働と子育てを分担する時に有効にはたらいてきたのではないかと、想像させる。



STK 祖父母は孫を非常にかわいがり、抱きかかえる場面はイベント時には非常に頻繁に観察される。祖父母が子育てに参加している動物は人間の他にはない。2016年から3世代住宅優遇補助金が施行された。子育てをしやすい環境をつくるための支援策である。都市への集中→核家族化→少子化の流れを変えようとする政策である。至誠第二保育園の運動会では高橋紘先生が「この機会に、家族の団結を強めてください。」と述べており、開催者側に家族の結びつきを強める場を提供しているという意識があることが理解できる。

### 3) 応援と歓喜 : 応援→がんばる (コミュニケーション)

応援は保護者から園児へのコミュニケーションであり、歓喜する行為もそれに答えるコミュニケーションであると位置づけられる。

#### 保護者が号泣する時

日常では、人が号泣するシーンを目にするのはごくまれである。

しかし、保育園のイベントの場では頻繁に発生するシーンである。

今回の一連の調査の中では、以下のような場面が観察された。

- ・ピアノカのアンサンブルで「ほたる」を演奏している時 (MGHおひなさま会)
- ・運動会の演目で大きな円形の布で、集団で演技をしている時 (ISH運動会)



ISHの運動会で号泣する母親：表情は重要なコミュニケーションであるが、人に見られていなくとも、豊かな表情を示し、号泣する保護者がいる。

- ・運動会で組体操をしている時 (SSD、ISH運動会)
- ・卒園式でこどもに親が語る時 (SDN卒園式)

イベントで保護者が号泣するケースには共通点を見いだせる：集団で行う活動である。

- ・ピアノカで演奏した曲は非常に単純に聞こえる「ほたる」である。アンサンブルには人の音を聴きながら自分の音を合わせねばならないので、一人で演奏するよりもはるかに高度な能力が必要になる (音楽指導者ヒアリング)。また、アンサンブルができるようになるのは最高年の5歳児で、自分のこどもが4歳児の時に5歳児のアンサンブルができていたのを観るだけで泣けてくる (保護者ヒアリング) のだそうだ。
- ・他の集団競技で号泣するケースも、同様にこども達がある「社会性」を獲得し、集団で競技できるようになっている (育ち) のを観て、感動しているのだと想像できる。

農業が主体だった時代には、家族で農業を営み、こどもは小さな時から家業を手伝うことによって、実際の労力になり、自然と暮らせるようになっていった。一方で、都市に住む家族は、社会から報酬を得ながら暮らしており、社会性を備えて行かねば社会の中で生きて行けない。

野生の動物でも、チームワークを組んで狩りを行うことや集団で身を守るなどの集団行動が見受けられるが、集団で複雑なことをすることは、他の人がやっていることを見てそれに合わせる、高い能力が必要となる (音楽の先生からのヒアリング)。社会性の一つである。

特に都市部では兄弟がおらず、一人っ子が増えている。ライオンやネコ、犬など大抵の動物が兄弟でじゃれ合いながら狩りの練習などをして餌を自ら獲得する能力を鍛えるような環境が得られない。保護者はその部分を保育園にこどもの社会性を育てることを期待している。こどもが育ったことを実際に目で確認し感動することで「育てたいという意識」が生まれるとすれば、運動会という行事は、保育上重要な機会を提供していると言えるだろう。

#### こどもが親にアピールする

表情が豊かで感激しやすい保護者のこどもは、同様に表情が豊かで、アピールしようとする傾向にある。MGHの「おひなさま会」では、母親が舞台の前列にいるのを見て、母親の前に移動し、練習で想定されていない立ち位置で演技を行った例があった。



MGH：お母さんは応援しているよ、こどもはがんばっているよ、とアピールしている関係性が明快に出ている場面である。

はたして、お母さんが応援しなければこどもはがんばらないのだろうか？という疑問がでてくる。それがニグレクトによるこどもの「グレ（やる気のなさ）」ではないだろうか。

「母親に喜んでもらいたいために生きているのがこども」ではないか、と定義できないだろうか。

また、会場から母親が手を振って、それに手を振って返すこどももいる。

母親が保育園にこどもを連れてきて、分かれを惜しむほど、こどもは泣くが、母親が園をはなれると、けろっとして遊んでいるシーンは過去に何度か保育園で目撃したが、それと似た事例である。

特に母親の期待にこどもは答えようとしてがんばる：褒める・応援する→がんばる、という関係は、親とこどもの重要なコミュニケーションであることを知らされた。

### 園児が歓喜する時

こどもがこのように歓喜して喜んでいる場面は見た事がなく驚かされた。この場面は同じ保育園（IHD）で目撃されたが、その都度、何をこどもたちに告げたのかを保育士に尋ねた

以下が目撃された歓喜のシーンである。

- ・演劇が今までで最高によかったと保育士に褒められた時（ISHおたのしみ会）
- ・体操演技が前回は99.9点だったが、今回は100点だったと言われた時（ISH運動会）



ISH：いっせいに「きゃー！」と歓喜しているシーンである。

大人になったらけっしてこのように喜ばない。

大人になる過程で、さまざまな感謝の意の表し方を習得していく中で、さも「喜んでいる」という表情と型にはまったよるこび方を見かけるが、こどもたちの喜び方には「ウソ」がない。

それは「いっせいに」喜んでいる様子から察することができる。

「褒める→がんばる」というこどもの習性を利用して保育士らがたくみに訓練して成し遂げられたのだった。

以上から、こどもが歓喜する理由は以下のように考えられる

- ・褒められてうれしい
- ・集団で努力して最高のできになった達成感

最初にこどもが奇声をあげて歓喜している様子が観察されたのは、いしだ保育園のクリスマス時の「おたのしみ会」での聖劇の後だった。このようなシーンは一度も観たことがなかったので、こども達に声をかけた保育士に聞いたところ「これまでで最高の聖劇だったと言っただけ」とのことだった。聖劇は、衣装や舞台装置を自分たちでつくり、司会もこどもたちでつとめ、劇は数ヶ月前から練習を重ねてきていた。

また、後者は組み体操で何種類もの複雑な組み体操を次から次に披露するために、これも毎日長期間にわたり練習したと言う。

一生懸命にがんばった成果を評価して褒めることが、次にこども達がんばる意欲につながる＝「評価・褒める→努力する」という場面を実際に観察した瞬間だった。

次にこども達と同様に奇声をあげて歓喜している様子を観たのは、同じ保育園の運動会だった。

「達成感」は褒められることにより得られる。それが生みの親でなくても、つまり保育者であっても「達成感」を与えられる、ということを証明している場面である。

保育は生みの親の替わりはできないのではないかと、という疑問は根強くあるが、これらの場面は、替わりはできることも証明しているのである。

### 魔法の言葉

MGHでは、保育者が「よくできました」と魔法の言葉をかけてあげてください。」と促し、実際に演劇が終わって、お母さんらがこどもに「よくがんばった」「よくできた」と言われて、こどもがお母さんに飛びついて足と手の全身で抱きついていているシーンもあった。

お母さんに評価され、褒められるのが最も嬉しいのである。

## 園児が号泣する時

この場面は運動会であったが、2度確認された。

- ・リレーで負けた時（2つの運動会で同じシーンがあった：STK、ISH）である。

くやしくて子ども達が号泣するケースは以下のような理由が考えられる

- ・練習では全勝していたが本番であるこどもが転んで負けてしまった（SSD保育士ヒアリング）ことが「くやしい」という意識を生んだ。
- ・他のこどもに負けるのが悔しい＝保護者に自分が優れていることを見せられなかったくやしき

上記の事象は、こどもに「競争心」が生まれた証拠であり、「競争心（負けん気）」は努力する意欲につながるため、「育つ」ということと定義してよいのではないか。

## 2. 空間セッティング（音響、外部、内部、広さ）

- ・音響は重要である：音響は空間と時間環境を形成する「時間・空間セッティングである」

ステージでやっていることや、アナウンスが届かない場所では私語が増え、場内が騒然となって見える。

また、保護者が号泣するシーンのバックでは「ミスチル」や「ゆず」など保護者が育った時代の音楽がかかっていることが多く、音響とともに、音楽の選曲は重要である。

私達の生活で特に結婚式や盆踊り、お祭りなどの行事などにも、音楽は欠かせない。

**外部空間：**（公園やグラウンド）での音響：外部空間で行事を行う時には、周辺の居住者を気にしなければならないので、おのずと遠慮がちに音を出すことになる。同時に、音は外部に拡散するので、音響での演出が効果的にできない条件が揃っている。

**いしだ保育園の運動会の例：**外部空間であるが、会場の外側に内側に向けて複数のスピーカーを配置し観客に近づけ、音がまんべんなく聞こえるように、かつ周辺に対して大音量をださなくて済むような音響計画を行っていた結果、会場のどこからもアナウンスや音楽が等しく聞こえていた。この運動会では、布を使った集団演技で号泣する保護者がいたが、音響や曲目が少なくとも効果的に働いていた。

音楽による演出がない結婚式を想像してみると（想像するのが難しいが）、音楽が不可欠であることと重要な役割が理解可能だろう。

## 内部空間

内部空間は音が反響しやすく、外に音が漏れにくいので、周辺に気を使わずに音を出せるので、音響による演出が比較的簡単である。しかし、音響機器は2つのスピー

ーカーを床置きにするだけの簡単な機器が使われることが多く、後ろの方に音が届かず、ざわつくケースも見られた。

**至誠第二保育園運動会の例：**日野市の大きな体育館で行われ、スピーカーがいくつも配備されており、業務用のオーディオ機器が整備されていた。オーディオ機器はある程度複雑であるが、施設側に使用の仕方の説明を受けることもでき、十分に使いこなせていた。（選曲を間違えたこともあったが）その結果、ホテルの結婚式場並みの音響空間を作り出すことができている、感動を呼び起こすために効果的であった。

観察した運動会では、「ゆず」の曲をバックに行われた演目で他人のこどもの演技をみて号泣している保護者の姿が観られた。

**万願寺保育園の運動会の例：**運動場としては比較的小さな小学校の体育館で行われ、ホータブルの音響で、拡散型の2つのスピーカーが使われた。スピーカーは放送コーナーの両側に置かれたが、正面と側では音量の差がおのずと生まれるために、音がとどきにくいエリアができていたが、空間が小さいので音が反響するので、十分な音響環境が形成されていた。

音響環境が悪いと、特に保育士のアナウンスが聞こえないと会の主旨や、どのようにこどもを褒めたらよいか、など保育士からのコミュニケーションが保護者に届かない。

## 音響（時間・空間セッティング）のあり方：

家族同士、保育園にこどもの家族が一同に会する機会は非常にまれであると同時に、企画して準備する側も相当な労力とエネルギーを要する。親族が集合することから、集団の属性は結婚式の属性に似ているが、保育園のイベントは、こども同士は知り合いであるが、家族同士はほぼ他人である。

その他人同士のグループが一つの時間・空間セッティングの中で行われるイベントで感動を共有するために、音響の貢献度は場合によってはビジュアルなものよりも高い。

今回の調査研究で得た、設計者にとっての教訓は以下のようにまとめられる。

- 1) 機器は簡便なものではなくてはならない。（女性が見えるように）
- 2) スピーカーは空間の中に複数まんべんなく配置することとする。（音が届かないところがないように）
- 3) マイク+オーディオ機器は、容易にハオらないオーディオシステムを使用する。（ハオりやすいと音量を上げることができない：シェアやオーディオテクニカなどの上級機器は、ハオリングを防止するための機構を持っている。）



4) 父兄の世代に共感を呼ぶ選曲を行う。

#### ・イベントを内部または外部で行う違い

今回の調査研究で対象としたイベントが行われた空間は大きく分けて、内部空間と外部空間との違いがあった。

内部空間と外部空間で生じていたことで違った部分に関して着目しながら、違いをまとめる。



#### 外部空間：

- 1) 車いすで地域の老人ホームなどからの訪問があった。また、案内や音などで運動会があることを知って、地域の方々の見学者もあった。
- 2) 最後の挨拶で、周辺の居住者に向かって、「ご協力ありがとうございました」と周辺に向かってアナウンスするシーンもあった。
- 3) 日が当たる箇所とそうでない箇所。芝生やそうでない箇所など、場所に特性があるので、客席にテントを貼るなどして環境づくりをしなければならない。

#### 内部空間：

- 1) 運動会の綱くぐり競技で父親たちがフローリングで怪我をしにくいのでスライディングをするなど、派手なパフォーマンスが観られた。(フローリングは安全なスライディングをアフォードする、と表現できる)
- 2) 壁があるので、壁にもたれて立つ、または座る姿勢で、複数の親同士、こども同士、家族同士のコミュニケーションが観られた。(壁にもたれることをアフォードすると表現できる)
- 3) コンパクトな体育館などでは、互いのパーソナルスペースが重なざるをえなくなり、応援が一丸となり盛り上がる。(外部空間でも、いしだ保育園の運動会のように、応援する側とこどもの距離が縮むように空間の使用を操作することによって、応援する側のパーソナルスペースを重ねさせることができる)

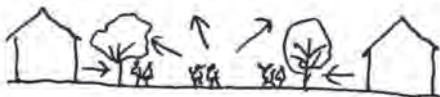
以下、主催者側からヒアリングした結果をまとめる

#### 運動会はやっぱり屋外でなくては（ヒアリング）

広くて、おじいさんおばあさんも来て、家族の世代間のコミュニケーションが取れる。祖父や祖母が保育園をきちんと評価していただけるという側面もある。

外部の日光の下の方が健康的で運動会らしい、という理由を述べる保育士もいた。

特に自分の園庭でできる場合には、近所の人々が来やすいので、という理由も挙げられた。



#### 内部空間は天候に左右されなくて楽（ヒアリング）

最近では音に対して敏感になっており、外部だと周辺からクレームが来ると開催ができない。

雨が降ると中止にして延期した場合に、告知、準備などをやらねばならなくなり、保護者にも迷惑が及ぶので、内部空間だと楽。

日よけテント、音響用具、周辺の安全の監視なども必要がないので、内部空間だと楽。

以上のようなことから、

保育園に運動会ができる園庭もしくは内部空間があり、地域できて、周辺の居住者や老人ホームなどから来やすい場所で、天候に左右されないことがベストであることが分かった。

しかし、敷地や建物の施工費が限られているケースが多いので、内外とも確保されているケースは皆無であり、自分の敷地で運動会を開催しているのは調査対象の園ではいしだ保育園のみだった。

屋外でも内部でも以下のように「時間・空間セッティング」を設けることでイベントに込められた意図が達成されると考えられる。

- 1) 外部空間であっても、いしだ保育園のように、外周に家族のたまり空間、トラックの周辺は流動的な応援スペースを設けることで、保護者たちとこどもたちの距離を縮めることができ、「応援して褒める→努力する」という効果を高めることができる。
- 2) 指向性があるスピーカーを最低4つ内側を向け、またハオリングしにくく操作しやすい機材を準備することで、外部空間でも良好な音響空間をつくることのできる。
- 3) 内部空間で行うケースは地元から離れてしまうので、告知をしっかりと、運動会を行う施設に車椅子用のトイレなどが備えられているか、駐車場があるかなどを事前に知らせて、祖父や祖母などが参加しても環境が整っていることを知らせることで、親族に関しては参加者を増やすことができる。

#### ●母と子の信頼関係

○送り迎えの空間でのビヘイビアセッティング：空間セッティングの変更による影響

・広いと、興奮して走り回る→スムーズに家の時間への移行ができない

延長保育時にお母さんが迎えに来るシーンの観察を行った。(SSH、YSK)

親たちが次々とやってきて園児と連れ立って帰る。残っているこどもたちの数が減ってくると、こどもたちは、徐々に落ち着きがなくなり、走り回る。

ここの保育園では、玄関部が広間になっていて、上記のような行動が観られたので、空間をある程度区切って、親子が会話を行えるようなセッティングを考えていた。

#### ・お母さんが話しかけるきっかけがあるといい：空間セッティングを変えてみた

最後に迎えに来た場合、こどもがお母さんにすねる場面があった。その時に、「お母さんも忙しいから」と返すと、そのしこりを家に持ち帰ってしまう。「待たせてごめんね」というのではその後の家の時間の過ごし方がちがう。(SSH：保育士からのヒアリング)

この保育園では2016年の秋に広い玄関ホール（半屋外）の改修を行い、入口を開き戸タイプから自動扉に改修し、いままでの木デッキ仕上げの床（外部仕様）を土間とフローリングに分けて、そこで靴を履き替えるように変更すると同時に、その日の食事や写真、お知らせなどの展示板と展示ケースを新たに設けた。そこで会話が生じることを期待していた。

改修した結果、さっそく期待した会話が生じたのである：お母さんが入口から入ってきて、こどもと出会うが、その時に「今日はこれを食べたの。おいしかった？」「この写真に写っているね」などの会話である。

このように空間セッティングをしつらえることによって、親とこどもが手をつないで帰る姿が確実に多くなった、とのことである。(SSH：保育士ヒアリング)

お母さんがこどもをあずけている理由が「ストレスからの解消」「自分の時間の獲得」であるとするならば、「自分が足手まといである」と意識させることは、こどもが「育つ」ための大きなマイナスになりかねない。

#### ・掲示物が時に親子のつながりを強める

お迎えでの保護者と園児のつながりは、「もの」がポイントとなることがある。

お迎えを観察している中で、「もの」を見ながら保護者と園児が会話をする様子が多くみられた。対象のものは、園児が書いた絵や作った作品、給食のディスプレイ、イベントの写真、お誕生日の園児が貼り出される掲示、季節の飾りなどが特にみられた。給食のディスプレイは、「今日これ食べた」と報告する園児もいた。園児が書いた絵や作った作品なども、自分の作品に指を指して話している園児の様子もみられた。園児は保育施設の掲示物を通して、日頃の自分の様子を保護者に伝えたいのかもしれない。逆に保護者が反応を示すこともあった。「今日はこういうものを食べたのか」と給食のディスプレイを見たり、ある保護者は園児の書いた絵を見つけて、園児に話しかけていた。

保護者にとって保育施設の中は朝と夕方にしか訪れな

い場所であり、日中の園児の様子はよく見えない。そのため、保育施設の掲示物や展示物などの「もの」が日中の園児の様子を断片的にはあるが知ることのできる要素となっている。そのため「もの」はお迎えの場において会話のきっかけの一つになっているのだろう。「もの」を通して園児は保護者に伝えたい自分の様子を伝え、保護者は園児の様子が知れる。保護者と園児の間に安心感をもたせてくれる一つの要因となっている可能性がある。

### 3. 〈人×もの〉のコミュニケーション

#### ●ゲームや疑似体験などのビヘイビアセッティングの役割

ゲームなどがセッティングされていたイベントは、万願寺保育園の「わっしょい祭り」のみで、かつ保護者たちが企画・運営を行っていたという特殊なものであった。

#### ・セッティングは親と子を近づける役割がある

Ex.祖父と孫とのボールすくい

ボールすくいゲームを行っているシーンで、ボールすくいの水槽の前にこどもと祖父が寄り添うようにしてしゃがんでゲームをする。はじめてのゲームに関して、こどもは知らないで、祖父が網ですくように勧める。こどもが網でボールをすくうと、その担当の父兄はすくえた「ごほうび」にボールがプレゼントされる。

「すくったボールが、すくえた『ごほうび』にすくったこどもにプレゼントされる」

これが、ボールすくいゲームの「ビヘイビアセッティング」である。

はじめてのこどもは「ゲーム」自体の意味を知らない。しかし、祖父の勧めるようにボールをすくうことによって、「すくえたご褒美」がもらえることを知る。

「努力して達成できるとご褒美がもらえる」という経験をさせることで、また別のゲームに参加したくなる。これは「評価・ほめる→努力する」という保育の基本と同じである。



イベントには家族が祖父母を誘ってやってくる。家族公認の接触行動とも言える。もし、これが他人の高齢者だったらどうだろうか。

コミュニケーションには様々な段階が観られるが接触行動は最も直接的なコミュニケーションである。その前提で互いの信頼関係が必要である。猿の母親は親族以外には世話をしない。親族であるかどうかは、コミュニケーションの意味が違うのではないか。

### Ex.くじを後ろで教えるお父さん

蜂の巣状に作られたくじ：蜂の巣の一つの紙を破ると中に、商品名が書かれた紙、もしくは何等か書かれた紙が入っている。何等かに当たった場合には、何種類もある商品の中から選ぶことができる。または1等の場合には再度くじを引いて、具体的な商品が当たる場合もある。といった手の混んだゲーム（ビヘイビアセッティング）である。

子どもたちはゲームのやり方や面白さはまったく知らないで、大人からどうやるかもしくは、前の子どもがやっているように真似することによって、ゲームに参加できる。

多くはお父さんが教える役目を負っていた。しゃがんで耳元で、「すきなところの紙をやぶってごらん」とささやく。等が決まると、沢山ある商品の中から「好きなを選んでごらん」とまたささやく。選ぶともらえるので、そこでこのゲームの仕組みを理解する。中には、「選ぶ」という決断ができずに、ずっと考えている子どもがいた。また、違う等に当たった子どもが選んだ賞品がうらやましくなって、そちらが欲しいとだだをこねる子どももいた。

紙をやぶってそこで賞品が決まったり、1等になって、再度くじをひいて特定の賞品があたっても、自分の好きな賞品を選ばなかったのを知って不機嫌になる子どももいた。

このゲームは「努力したら褒められる」類のものではないので、「くじ」のゲーム性を知る、または自分の努力ではどうにもならない理不尽さを知る結果を生んでいくようであった。

社会でも様々ないとのもとで同様なゲーム性を含むしくみがいくつもある。ここでは、父親もしくは祖父の重要なコミュニケーションツールとしての役割を持っていることに着目したい。

元来、父親は子どもとのコミュニケーションは母親と比べるとはるかに下手である。そんな父親のために母親がつくったのではないかと思われる。



教える時には姿勢を低くして視線を子どもに合わせ、後方から耳のそばから語りかける。

子どもに話す時や教える時に大人がとる行動パターンの一つである。

教えている父親（または祖父）の顔はいかにも嬉しそうである。

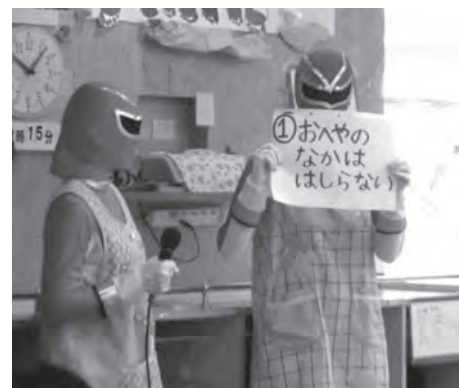
チンパンジーは血縁関係がある場合、孤児を養うことがある（「ヒトとサルの違いがわかる本」杉山幸丸編著）。血族の子どもはかわいいという本能がある。血族で互いに助け合うようにDNAに組み込まれているのかも知れない。

### Ex.母親の赤レンジャー

母親の一人が赤レンジャーに扮していた。言葉は話せないというのが前提で、奇術のパフォーマンスをやっていた。この奇妙なセッティング（しかけ）は子どもたちに強い感心を寄せ、握手したり、話しかけたりする。

もし、赤レンジャーに扮してなければ、子どもは寄って来ないし話しかけもしない。子どもは単純に人を姿形で判断し、誰かが扮しているなどとは思わない。

子どもの気を引いて集中させるためには有効に働いていた。





こどもが大人に話しかける時、「だれのお父さん?」「カメラマン?」「撮って撮って!」など、こどもは疑問があれば、躊躇なく問いかける「動物」(DNA)なのである。

そのような性癖を持つ「動物」にとって、赤レンジャーは全て謎の存在で、高い好奇心を抱かせる。

この日の赤レンジャーは言葉が話せず、文字でこどもたちに語りかける。こどもたちの好奇心は高まるばかりである。

好奇心が生ずるということは、自ら学ぼうとする意志の芽生えである。

#### Ex.秋田の「なまはげ」

「泣ぐ子はいねがー」「親の言うこと聞かぬガキはいないがー」とウォーウォーと奇声をあげて家に入ってくる。家の主人はただひたすら謝り、機嫌をとり、丁寧にもてなす。こどもへの荒療法である。

「美しき水の郷あきた」

<http://www.pref.akita.jp/fpd/bunka/namahage.htm>



謝りながらこどもを守る親。

親への信頼感が高まると同時に、親の言う事を聞かないとまあ「なまはげ」がやってくるので、こんどはこどもが言う事を聞かない時に、「なまはげ」呼ぶよ、とおどすことができる。

「悪い事すればひどい目にあう」ということも保育上使われる。例えば童話などもそのような内容のものがある。

赤レンジャーは正義の味方で、「なまはげ」のように、こどもをつれ去ろうとはしないが、疑似体験(セッティング)によって、さまざまな価値観をこどもに理解させることは保育上有効である。

そもそも、運動会や演劇も、作られた「疑似体験」である。

#### Ex.久我山幼稚園(杉並区)茶室

久我山幼稚園には、40年以上前から本格的な茶室でお茶を教えるための茶人を雇っており、毎日、先生やこどもたちにお茶をたてて飲ませている。国会議員や文豪になった卒園生もいるが、挨拶で茶室での体験談を語る文化人が多い。

何もわからずに作法をならってお茶室でお茶を飲んだ体験は、「日本の高い文化があることをその時に知った」ということである。

ネコ科やイヌ科の動物などは、こどもの時にじゃれ合って、相手のクビに噛み付く真似をする。これは狩りの疑似体験を行っており、動物は生きるために、餌をとるための訓練を行う。

人間の場合には、社会の中でお金を得て生きていくための訓練を幼少期から親たちによってされねばならないが、親はどのような疑似体験を行えばこどもにとってよいのか分からない。そもそも、近代まで日本の主たる職業は農業であった。農業社会では、小さな頃から、こどもは親の真似をしながら農作業を行い、労力だったが、今のように都会生活者が増え、ITなどさまざまな新しい業種がでてきている現代では、どのような訓練をすればよいのかは分かり得ないのである。

最近のこどもはネットやゲーム、スマホなどに触れる時期が若年化しており、保育上の検討が急務である。

万願寺保育園での「わっしょい祭り」は自主的に形成された「保護者会」による自発的なもので、明らかに保育園が行うイベントとは内容や質が違っており、保護者会による企画・運営で行う内容は、まさに生みの親が自分のこどもに体験させたいことを真剣にかつ素直に考えたものであると同時に、保育園にもこのような保育をやりたいと表現しているようにも見える。

#### 【まとめ】

以下のようなコミュニケーション行動が見いだされた

- ・家族間のコミュニケーション

最も活発に行われる。

- ・保護者同士のコミュニケーション

送り迎え時を含め、活発である。

保護者同士はこどもを観ながらのコミュニケーションが大部分であった。

#### Ex.代々木至誠こども園

- ・こども同士のコミュニケーション

園児同士は待っている時など。

園児の兄弟同士が多分小学校等で同級生だと思われるが、コミュニケーションをとっている様子が観察された。

- ・保護者と保育者とのコミュニケーション

表彰する

かたづけを手伝う

家族との立ち話

- ・保育者と園児のコミュニケーション

褒める 誘導する 教える

- ・家族と園児のコミュニケーション

褒める

なでる

教える

だきかかえる

保育者同士のコミュニケーション

そして、以上すべてがイベントが提供した「空間セッティング」で発生した「ビヘイビア」であるとしてよいだろう。

#### ○イベント（ビヘイビア・セッティング）が果たす役割

いくつかの保育園ではイベントの意図を冒頭に述べていたが、

「日頃のみなさんの成果をお父さんお母さんに見ていただきましょう。」

「運動会を通じて、家族の団結が強くなっていただくよう望みます」

「どのように日頃わたしたちが保育しているかをみていただきたい」

「おわったら、『よくできた』と『魔法のこぼ』をかけてあげてください」

などのアナウンスから、園のイベントに託している意図を読み取ることができる。

以上のことから運動会や演劇などのイベントには以下のような役割が込められ、または、果たしていると考えられる。

- 1) 自分のこどもの「育ち」を確認し、感動することで、また「育てよう」とする意識が高まる。
- 2) 保育の成果を保護者に知らせる。
- 3) みんなで応援することによって、こどもに自分は期待されていることを知らせる。
- 4) 家族が団結して応援することによって、家族の育てる意識を高める。
- 5) 保育士は育て方を伝え、また保護者は保育の仕方（褒め方）などを学ぶ。
- 6) こどもが育った感動を共有することによって、保護者が働く意欲を高める。
- 7) 祖父母が孫とのスキンシップを高める。

イベントの調査を行うと当初決めた理由は、保育士、保護者、園児たち同士のさまざまな次元のコミュニケーションが観察できるのではないかと期待したからであった。それに対して、共同研究者の桑江佐愛は、夕の送り迎えの時間帯で同様に、3者間のコミュニケーションが観察できると期待した。

#### ○送り迎え時の空間時間（ビヘイビアセッティング）が果たす役割

こどもが落ち着いて親を待てる空間セッティングが望まれる。

送り迎えの空間は、親と子がコミュニケーションを取

り戻すために大切であり、「もの」はそのためのきっかけづくりに有効である。

#### ○空間セッティングが果たす役割

##### イベント空間

- ・コンパクトな空間ではコミュニケーションが活発になる

屋内でのイベントを比較すると、保護者同士の距離、保護者と園児との距離が近く、互いのパーソナルスペース<sup>(※)</sup>に重複がある方が、応援に熱が入る。

保護者のビヘイビア：「応援」＝期待、「拍手喝采」＝喜び・評価

が盛り上がるほど、受け手の園児らは、

園児のレスポンス：喜んでもらいたい、高い評価を得たいという意志が芽生えやり遂げる意欲が高まる。



逆に空間が広すぎると、応援が散漫になり、盛り上がり<sup>\*</sup>。

(※応援の盛り上がり：全体の音量である程度計量的に計測可能であるが、空間内の音圧総量を計測し、比較するには人数で割る必要がある。今回は、そのような計測器を準備できなかったので計測していないが、その場で観察していると比較可能である。)

#### 経年で開く効果が認められる

空間に連携した事象ではないが、保育園には最も長い場合で、0歳～5歳の6年間一人につきあずけるが、こどもが数年毎に何人も生まれる場合も少なくなく、至誠第二保育園では一つの家族が18年間保育園に世話になったケースがあった。(これは一つの事例なので、実際はもっと長く保育園に関わるケースはあると想像される)

上記のように、同じ家族が経年でイベントに参加することによって、学習効果が生ずる。例えば、応援席の確

保の方法（花見のように敷物で確保するなど）、こどもへの褒め方などである。（万願寺保育園の「おひなさま会」では、ピアノなどの楽器でのアンサンブルで保護者が号泣する様子が観察できたが、保護者へのヒアリングで、自分のこどもでなくても泣く事があることが分かった。その時点では自分のこどもがアンサンブルができないのであるが、自分の子が次の年にできることを想像するだけで感動できるのだそうだ。

自分のこどもの「育ち」に関して保護者は特段の感動を覚えるようになってきていると言える。（DNAにプログラムされているとしてよいのではないか）

0～2歳児の乳児は、夜泣きをし、言葉が通じず、期待通りには動いてくれない。育児期間に入ると、仕事どころか自分の時間がまったくとれず、またコミュニケーションができない相手と家の中にいると、ストレスがたまる。

そのように手のかかることは、「号泣するほどの感動」を覚えるために必要なことではないか。もし、生まれたこどもと会話ができ、昼の一定時間にしか母乳をほしがらず、放っておいても自らまなび、何でもできるようになっていたら、親は感動するだろうか、育てようとする意欲は、生まれた当初（乳児期）があまりにも親の思いどおりにならないことは保育上重要、もしくは不可欠ではないだろうか。

- ・コミュニケーションが活発に行われるためには各々の会話集団が滞在するための空間的仕組みが必要（動線と「たまり」空間の設定が有効）。

万願寺保育園の「わっしょい祭り」：家族同士、こども同士のグループが生じていた場所に注目すると、設定されている動線や出店から外れた空間でグループが生じていた。テラス、道路側のテラス、その他である。

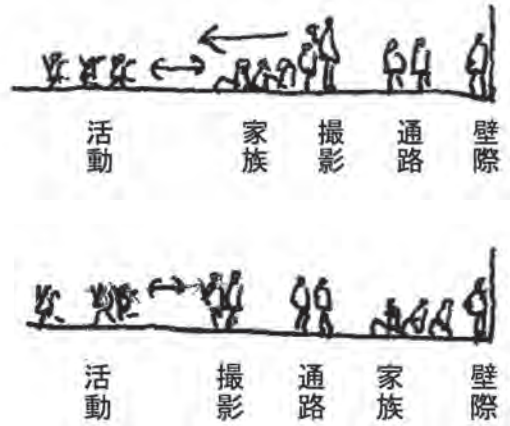
家族同士、こども同士の会話は、互いの距離が近く、ソシオパタル的な関係が取れなければ、実際には会話ができないので、そのような空間セッティングが生じるように、動線からはずれる空間に「たまれる」ように工夫しえおくことが有効である。

このようなイベントが、家族間、こども間のコミュニケーションを活発に生じさせ、つながりを強めることを目標にしているとするれば、空間セッティングの「しつらえ」方を知っておけば、より有効にその目標を達成できるだろう。

- ・こどもと保護者とのコミュニケーションを高めるためには、演者（こども）と応援者（保護者）との距離は近い方がよい

いしだ保育園の運動会：通常の運動会ではコースに接する空間に家族が陣取る形式を取らせているが、いしだ保育園では、外側に家族グループの場所を広く設け、コースに接する空間は撮影や応援のためのフリースペースとして確保していた。

このことによって、自分のこどもや孫が登場する演目のみに近くで応援できるために、こどもたちと親との「応援-がんばる」というコミュニケーションが成り立ちやすくなる（通常のケースだと、撮影は家族グループの後ろから行い、場合によっては応援も遠くなる）。風景としても、コースの周辺に大人が立ってぐるりと囲うので、こどもから観ると人で囲いの壁が立ち上がっているような形態となり、保護者たちから応援されている風景がより明確化される。



こどもががんばる原動力は保護者による応援であることは、今回の調査でよく理解できた。運動会でこどもに保護者の応援がとどきやすくし、こどもがそれに答えられる環境をつくるためには、互いの距離を縮めることが有効である。いしだ保育園の運動会での空間セッティングは、それを明快に意識して行っており、同時に有効に保護者とこどもとの間に「応援-がんばる」というコミュニケーションをつくりだしていた。



群衆の Personal Space



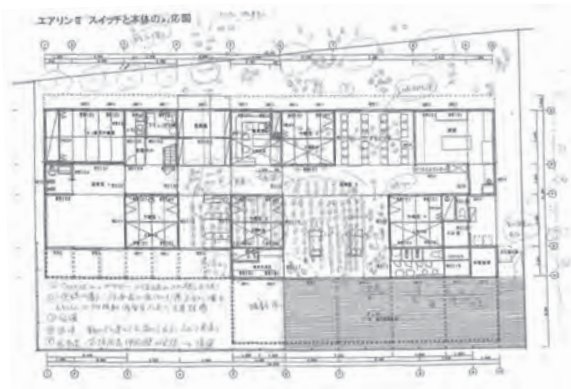
小集団の Personal Space



・保育士らと会話するための「時間」と「空間」を用意する

万願寺保育園の「おひなさま会」

まつりは、2つのグループに分かれて行われ、次の会の控え室は別棟の「にこにこ広場」に設定され、最初のグループと動線が交わらないように工夫することにより、入口で保育士らが結婚式のように見送るように「時間」と「空間」のセッティングが行われていた。このような時間・空間セッティングが<sup>(\*)</sup>「意図的に」行われていることによって、保護者たちは、それを感じて気軽に会話することができる。このことは、保育園と保護者のつながりを強め、信頼感を生むことに有効にはたらくのではなかろうか。



※時間・空間セッティング：ある行動が生じるためには、時間が確保されていなければ生じないケースがある。時間が意図的に確保されている空間セッティングを「時間・空間セッティング」と呼ぶことにした。

おわりに

保護者、保育者はこどもの「そだち」を喜びとして高め合い、保育を行っていることが理解できた。この調査を行いながら、はたしてこどもはどれほど保育者や親の意志を理解しているのか疑問になってきた。

・こどもはお母さんの立場をきちんと理解する能力がある（SSDの卒園式）

こどもとお母さんの信頼関係に関して思い知らされたシーンがあった。

卒園式でお母さんが自分のこどもに対してメッセージを述べるシーンである。

「お母さんが遅くに帰ってくると、『お母さんいつもありがとう』と言ってくれる言葉がどれほど励みになったか、お母さんのこどもに生まれてくれてありがとう。」といった内容だった。多くのお母さんは同様のことを言う。（大抵のお母さんは号泣しながら語るの、かなり感動的である）

こども達にお母さんをねぎらうように勧めたことはない（SSD：保育士ヒアリング）のが本当であれば、こどもは立場を理解して、自分を育ててもらっている母親に

感謝しねぎらう能力を備えていることになる。

また、YSKの園長先生は、「こどもは生まれてから自分の居場所を探す存在なのです」と教えてくれた。（YSK保育士ヒアリング）

こどもに対する希望：こう育て欲しい

代々木至誠こども園のエントランス空間に保護者から自分のこどもへのメッセージ貼り出されていた。

女の子に対して：明るく優しい子、小さい子の世話をするようになって、なっとうれしい

男の子に対して：チャレンジする子になってくれうれしい。

このことは、親は女の子に対しては、将来自分のこどもをきちんと育てるための「母性」が芽生えてくれること、男の子に対しては「挑戦しようとする意欲」が芽生えてくるのが「育つ」の内容である、ということに分らせてくれた。

今回調査で理解できたことの一部は、すでに設計に役立てることができた。

また、設計の際のよりどころとして「育つ」ことの内容が自分なりに理解できたことは成果として大きかった。

調査前には、何もわからないかも知れないという不安があったが、プレ調査を行った結果、目にした行事は感動的なもので、子育てに対する認識が大きく変わった。

このような調査研究を行う機会を与えていただいた日本保育協会に感謝したい。